

## 18. 戊辰戦争に奥羽越列藩同盟のフランス 陸軍教官雇入れのことについて

問 奥羽越同盟軍が、幕府が招いたフランス陸軍教官団の一部を、幕府瓦解のため幕府から離れたの<sup>(1)</sup>を機会に、これを雇入れようとして、首席教官シアノアンに交渉した事実があります。この時に、シアノアン等と直接交渉に当たったのが会津藩士柏崎佐一及び米沢藩士稲葉某であることを、故田保椿潔氏が「史学雑誌第34編第12号」に収めてある「箱館役に現れたる日仏関係の考察」と題する論文にあると聞いています。ところが、米沢藩の記録には、その衝に当たったのは、会津藩の雑賀孫六郎、米沢藩の佐藤市之丞であると書いてあります。そこで、その何れが真実なのかを調べていたところ、某大学のT教授から、田保氏が柏崎及び稲葉がフランス士官雇入れの交渉に当たったと書いたのは、「仙台戊辰史」775～779頁及び834～835頁の記載事項を引用したものであるとの御教示を受けました。本県図書館には「仙台戊辰史」がありませんので、貴館に備え付けてありましたら、右該当の頁の記載によって、その交渉の経過ならびに交渉にタッチした人達の人名等をお教えください。

なお、「仙台戊辰史」の著者名、発行年月日等お示しくくださるようお願い申し上げます。また当該頁のコピーをとって御頒布いただければ幸甚に存じます。

答 単なる聞き覚え等に基づいての御質問なので、大分錯綜混乱があるように思われます。まず第一に柏崎及び稲葉という人物も、フランス士官雇入れのことも、「仙台戊辰史」の御指示の各頁には勿論、全巻のどこにも一語も記されていません。かえって、715～716頁に、雑賀と佐藤の名が現れておりますが、勿論両者の役割は別件であります。この両人が会津藩主松平容保〔かたもり〕と、白石にあった徳山四郎左衛門〔老中板倉伊賀守の変名〕および山中寛助〔同小笠原老岐守の変名〕連署の書簡を慶応4年7月、品川沖に碇泊中の軍艦開陽丸に坐乗していた榎本釜次郎に手渡した事実が記されているのです。この書簡は、会津藩主らが榎本に対し、彼が掌握している旧幕海軍をもって、越後口の西軍の背後を突くよう要請したものです。これに対する榎本の7月21日付の返書が載っています。その文面には、徳川家の静岡移封の護送が来月20日頃までかかるので、それが終り次第艦隊を率いて仙台に赴き、その上で行動を協議したい旨が述べられており、当時彼の傘下に入っていたフランス士官のこと等については、全く触れていません。このことは「横尾東作翁伝」にも同様の記事があり、7月7日新潟開港会議所を代表して、仙台藩の横尾東作と会津の雑賀、<sup>(2)</sup>米沢の佐藤が、11か国公使・領事宛厳正中立を要請した5藩（仙台・米沢・会津・長岡・庄内）重職連名の書簡を携え、同時に榎本との連絡をも兼ねて、英艦アルビアン号に便乗し津軽海峡經由横浜に向っています。13日西軍の手中にある横浜に上陸、3人は44番館スネル商会の2階に潜伏しつづ

使命を果すのですが、とにかく雑賀・佐藤兩名はこれ以外のことで「仙台戊辰史」には登場しておりません。T教授の教示は、何等かの誤解によってなされたものであります。

さて、シアノアンを長とする 25 人のフランス士官は、慶応元年（1865）の幕府とフランス公使ロッシュとの交渉で、陸軍教師として招かれたものです。同 3 年正月に来日し、幕軍の指導訓練にあたりましたが、幕府崩壊のため翌 4 年 7 月全員解約されました。シアノアンをはじめ、彼等の大部分は帰国したが、砲兵大尉ブリューネ等 10 名は、フランス士官の名誉にかけて旧幕軍を応援することを主張して、教官団から離脱して残留したといわれます。それらのフランス士官に対する奥羽越同盟としての引入れ工作があったかどうか、解明すべき資料が見当りません。もし、仮にそのことがあったとしても、全然実現を見なかったことは歴史の示すところであります。当の残留士官のブリューネやカヌーフ等は、榎本の開陽丸に乗艦、8 月 19 日品川沖を脱出、26 日寒風沢に到着しました。9 月 2 日、ブリューネならびにカヌーフは榎本にとまなわれて上仙、仙台城で藩主伊達慶邦に面接、翌 3 日は主戦派の軍議に加わり、9 日には南境の戦線を視察しています。榎本はこの 2 人を同盟が雇入れて戦略を改める必要のあることを力説しています。しかしながら、同盟の盟主伊達慶邦は 9 日夜降服を決意し、翌 10 日夕刻降服使を発しており、一方の盟主米沢藩主も 9 月 4 日既に降服してしまっております。この期〔ご〕に及んで榎本は仙台を去り、10 月初め旧幕艦隊を率いて寒風沢から北海道へ向けて出航しました。ブリューネ等は終始榎本と行動を共にし、箱館における旧幕軍の作戦に全面協力を続けました。そして翌明治 2 年 5 月 1 日、五稜郭の敗戦が決定的となった時、母国フランス軍艦に収容されて帰国しました。結局、仙台におけるフランス士官団の行動に徴しても、彼等と奥羽越同盟とのかわりについて、さしたる問題を残すものではなかったのであります。

なお、「仙台戊辰史」は、戊辰史の定説を示した大著で、著者は藤原相之助、明治 44 年 7 月 4 日仙台荒井活版製造所発行。極めて残存の少ない稀覯本でしたが、昭和 43 年 5 月 10 日復刻版発行。間もなく発行所柏書房が廃業したため、それも今では新本としては入手できなくなりました。

注(1) 「奥羽皆敵」とする薩長との決戦必至に追い込まれた奥羽 25 藩の重臣が、慶応 4 年 5 月 3 日仙台片平丁松の井御殿に会同して、従来の平和同盟を軍事攻守同盟に切替え合意調印した。後に越後の 6 藩も参加した。これを奥羽越 31 藩同盟と称する。31 藩とは、仙台・米沢・盛岡・秋田・弘前・二本松・守山・新庄・八戸・棚倉・相馬・三春・泉・山形平・福山〔松前〕・福島・本庄・亀田・湯長谷・下手渡・矢島・一関・上山・天童・新発田・村上・松村・三根山・長岡・黒川である。しかし、同盟の結束は必ずしも強固ではなく、西軍の進攻が進むにつれて動揺が起り、秋田・三春・相馬の反盟、弘前・新発田の脱落等もあり、9 月に入ると次々と敗北崩壊してしまった。この同盟成立のため最も尽力したのは、仙台の玉虫左太夫・若生文十郎であった。

注(2) 志士。諱は常綱「つねつな」、鳳号と号す。天保 10 年（1839）2 月 18 日加美郡下新田

〔旧鳴瀬村〕に生れた。16才のとき仙台に出て、経史詩文を藩儒新井雨窓に学んだ。23才で江戸に遊学し、大学頭林学斎の門に入り、また仙台藩在江戸の学生の監督を命ぜられた。27才の時藩命によって横浜の米人宣教師ジェームス・ブラウンについて英学を修めた。慶応4年5月、30才の時藩の英学教授に任ぜられた。同月末、新潟開港会議所に草名鞆負に従って出向した。7月各国公使宛の書簡を送達する命を受けて横浜に潜行した時、西軍は彼を逮捕するため500両の懸賞をかけたという。「仙台戊辰史」（藤原相之助）に『米人ライスト共ニ七月七日英国軍艦アルピアン号ニ塔シテ新潟ヲ発シ横浜ニ至リ各国公使及ビ領事ニ布配セリ』とある。使命を果たした横尾は、鉄砲売込みに仙台に向うライストの米国船で帰藩した。明治3年7月東京府少属となったが、翌4年2月、牛込早稲田に北門社〔東京専門学校、早稲田大学の前身〕を設けて、英学を教えた。同年5月、仙台藩知事伊達宗敦〔むねあつ〕が、英学校を百騎丁〔東二番丁〕旧医学館跡に創設して辛未館と称し、横尾を教授とした。辛未館は翌5年10月廃校となったが、特に注目すべきことは、明治の生んだ世界的な英語学者斎藤秀三郎が、わずか6才で特に許されて同校に入学していることである。11月、彼は神奈川県10等出仕となり、修文館校長を兼ね教育に従事した。ついで警視庁4等警視に命ぜられ、19年2月退職した。20年、火山3島〔硫黄島〕を視察した帰り、21年8月「南洋群島独案内」を発行した。24年、株式会社日本興信社を創立して南洋開発を企てた。35年足尾銅山鉍毒被害者を南洋に移す計画をたて、海軍に廢艦貸与を請願したが成功をみなかった。明治35年7月21日、友人富田鉄之助を小石川に訪問して対談中、にわかに発病し翌日遂に歿した。65才、東京谷中天王寺に葬る。「好日舎詩稿」1巻の著がある。

注(3) 五稜郭の戦いは、戊辰戦争最後の戦で箱館戦争ともいう。明治元年11月1日、榎本武揚は旧幕艦隊を率いて箱館に入港し、五稜郭に入った。五稜郭は旧幕府の築造した洋式要塞である。榎本は、北海道を根拠にし幕威の回復を図ったが、明治2年5月11日からの政府軍の総攻撃に敗れ、同月18日降服した。ちなみに、箱館の地名表記を、この後新政府が函館と改めた。

資料 仙台戊辰史（藤原相之助）  
維新の内乱（石井 孝）  
資料 榎本武揚（加茂儀一編）  
横尾東作翁伝（河東田経清）  
東一番丁物語（柴田量平）